

第一次大戦とプレッツォリーニ

小林 勝

はじめに

プレッツォリーニは第一次大戦からほぼ三十年の時を隔てた 1946 年、古くからの友人で画家のアルデンゴ・ソッフイチにあてた手紙の中で、1914 年に戦争を望んだことを非常に後悔していること、そしてこの戦争は民衆の意思に反して行われたことを述懐している⁽¹⁾。また、プレッツォリーニは、第一次大戦に関するさまざまな文章のアンソロジーを 1918 年に刊行しているが、半世紀後の 1968 年に出されたその第三版に付した序文の中で、イタリアが敵として戦い、その破壊に手を貸したオーストリア・ハンガリー帝国は、多様な言語や文化を有するヨーロッパの統合の最初のモデルとなりえたのではなかったか、という疑問を呈している⁽²⁾。

1911 年にリビア戦争に反対したプレッツォリーニは、ダンヌンツィオや未来派のような戦争賛美者ではなかった。イタリアが参戦した 1915 年に刊行された『ダルマツィア』という小冊子の中で彼は、当時はまだ帝国主義は悪であるという考え方が人類の共通認識とはなっていなかったにもかかわらず、はっきりと帝国主義反対を表明している⁽³⁾。若い頃兵役に就くことを嫌って外国逃亡さえ考えた彼は、大の軍人嫌い、軍隊嫌いだった。また、早くから外国にあこがれ、熱心に外国文化の吸収と紹介に努めたプレッツォリーニが偏狭なナショナリストでなかったことは言うまでもない。

それでは何故、その彼が 1914 年にヨーロッパに大戦が勃発すると熱烈にイタリアの参戦を主張、1915 年にイタリアが参戦に踏み切ると直ちに従軍を志願するような行動をとったのだろう。それは、プレッツォリーニが師と仰いで敬愛してきたクローチェやロマン・ロランの考えに完全に反するものであった。こうした疑問について検討を進めることが、本論文のねらいである。

I. では第一次大戦勃発の際のプレッツォリーニの行動と思想を主としてクロ

ーチェとの往復書簡を通して考察し、II.では数年に及ぶ従軍体験が、イタリアやイタリア人に関する彼の見解にどのような影響を与えたのか、この時期の彼の著作を通して検証してみたい。

I.

1914年6月28日のオーストリア皇太子の暗殺、いわゆるサラエボ事件をきっかけにして、7月28日オーストリアはセルビアに宣戦する。8月に入ると、ドイツ、ロシア、フランス、イギリスも参戦し、たちまちのうちに戦火はヨーロッパ全土に拡大する様子を見せたが、そうした中であってイタリアは中立の態度を保持した。これに対し、プレッツォリーニは、英仏露の三国協定の側でのイタリアの参戦を主張、9月19日の日記には兵役を志願するために、《ラ・ヴォーチェ》をデ・ロベルティスに託すという決意が記されている⁽⁴⁾。そして、12月初旬には、参戦論を主張して社会党を追放されたムッソリーニがミラノに創刊したばかりの《ポーポロ・ディターリア》の特派員としてローマに赴いている。それはイタリアの参戦に尽力するためであった。後年、プレッツォリーニはそのことを後悔しているが、あの当時は自分がある使命に従っているように思われていた、と回想している⁽⁵⁾。

1908年フィレンツェに《ラ・ヴォーチェ》を創刊、この雑誌を拠点に多彩な文化運動を指導、イタリア文化の一郭にすでに一定の地位を築いていたプレッツォリーニとしては、これはかなり思い切った行動だった。しかしながら、これを一時の戦争熱に浮かされた軽率な行動と解釈することはできない。政治学者レンツォ・デ・フェリーチェは、プレッツォリーニは戦争の勃発に対し冷静さを失わなかったし、いかなる形のヒステリーに身をまかすこともなかった、また、彼の参戦の主張のどれ一つをとっても感情に訴えるといった類のものはない、と指摘している⁽⁶⁾。1911年に彼がリビア戦争に反対したのは、人道的な平和主義によるものではなく、当時まだ石油も発見されていないリビアのような不毛の地を併合することは全く無意味であるという合理的な理由に基づいていた。その意味でプレッツォリーニは常に冷静な合理主義者だった。

(1)

第一次大戦の戦端が開かれた1914年8月から10月にかけて《ラ・ヴォーチェ》に発表された文章をいくつか見ることで、この時期のプレッツォリーニの戦争に対する考えを検証してみることにしよう。まず、ヨーロッパの広い地域に戦火が拡大した直後の8月13日、ラ・ヴォーチェの署名で『時間 L'ora』という短い文章が巻頭に掲載されている。そこでは、戦争によって文明が危機に瀕することはなく、ヨーロッパは激動の後に長い平和を享受することになるという楽観的な展望が述べられている。普仏戦争後の独仏両国の目覚ましい発展にも触れているが、当時のヨーロッパの人びとに戦争のイメージを提供してくれるのは、1870年のこの戦争くらいだった。第一次大戦が人類に空前の惨禍をもたらすことになるという予測はできなかった。普仏戦争後半世紀近くヨーロッパに大きな戦争がなかったことを思えば、こうした楽観的な見通しも納得できる。

プレッツォリーニは、友人のアレッサンドロ・カザーティにあてた8月8日付の手紙に、この戦争がヨーロッパ百年の平和を保証する、と記している⁽⁷⁾。第一次大戦後のヨーロッパではファシズムやナチズムが台頭し、再び第二次大戦の戦火に見舞われるわけであるから、現在の我々の目から見れば、プレッツォリーニの参戦論は誤った見通しから出発していたことになる。そして、後年彼自身そのことを痛感させられることになる。この文章の最後では、イタリアが中立という困難な課題を選択したことに触れ、高潔な精神をもってイタリアが身を処してゆくことが希望されている。

1914年の《ラ・ヴォーチェ》は、それまでの週刊の新聞の体裁から隔週発行の雑誌体裁に模様替えをしていたが、プレッツォリーニは8月28日号の巻頭の6ページを使って『戦争をやろう Facciamo la guerra』という論文を自らの署名で発表、イタリア参戦の論拠を明らかにしている。プレッツォリーニは、あらゆる国々にとって、その自律性、その独立を示すことが何よりも肝要であり、それが人類の文明への貢献であるが、中立はそれを消極的に示したことにしかない、と考える。イタリアは作られたが、まだ完成しておらず、しかもひとりで作られたわけではない、と彼は言う。彼によれば、リソルジメントにおけるイタリアの統一と独立の達成は英仏のような外国の保護や援助、それ

に1866年の普墺戦争や1870年の普仏戦争のような周囲の幸運な状況に助けられたものであった。イタリアは今こそひとりでも何かをやる能力があることを証明する必要がある、と彼は言う。

プレツォリーニはさらに、どういうタイミングでどちらの側で参戦するのが有利であるか、といった打算や計算を低劣なものとして斥ける。彼が考えるのは義務としての戦争である。戦争が短期間で容易に決着することはないという見通しを示した上で、それでも平和が達成されたときに世界に顔向けができるようにするためには戦争に参加しなければならない、と彼は主張する。つまり、戦争というイタリアに課せられた試験にパスすることが問題である、と彼は言う。これまでのイタリアは偉大さにあこがれる国民だったが、今問題なのはイタリアが一つの国民であるかどうか、我々が知ることである、とプレツォリーニは結んでいる。

ラ・ヴォーチェと署名された9月13日の論文『戦争を前にしたイタリアの諸々の党派やグループ *Partiti e gruppi italiani davanti alla guerra*』では、ヨーロッパの戦乱を前にした人びとの当惑や国論の分裂が描かれている。また、自らの署名で発表された、9月28日の『裏切られた戦争 *La guerra tradita*』という文章の中でプレツォリーニは、イタリアが教会と国家の妥協や中産階級と社会主義の妥協によって永遠の欺瞞に苦しんでいることを指摘、参戦の遅れが真の国民的戦争から道徳的価値を取り去ってしまうことを危惧している。彼は、戦争が正義のために行われることを主張、それに踏み切れない優柔不断なイタリアに苛立ちを覚えている。《ラ・ヴォーチェ》の運動は、どうしても駄目なイタリアを改革しようとの決意から出発したわけであるが、プレツォリーニの参戦論もこの線で一貫している。

ラ・ヴォーチェの署名が付された、10月13日の巻頭の論文『社会主義者たちは中立派ではない *I socialisti non sono neutrali*』では、社会主義者たちの中立の主張が実際にはドイツ・オーストリアの側を利するものでしかないことが指摘されている。そして、《ラ・ヴォーチェ》にも寄稿するなどしてプレツォリーニとは旧知の間柄で、9月に社会党機関紙《アヴァンティ》の編集長を辞任したばかりのムッソリーニに対し、勇気を出して参戦論に踏み切ることを促している。そこではオーストリアとの戦争に正当かつ神聖な大義という表現を用い、ムッソリーニもそのことを知っているはずである、と断定している。こ

の論文の後半はムッソリーニに対する呼びかけに費やされているが、そのことからしても筆者がプレッツォリーニであることは間違いない、と思う。

(2)

青年時代のプレッツォリーニに対するクローチェの影響は圧倒的なものがあった⁽⁸⁾。

1905年、思想的に行き詰まりフィレンツェからペルージャに移り住んだプレッツォリーニは、精神的な危機から抜け出す道を模索しつつ、この地で瞑想に明け暮れる日々を過ごしていたが、同地を避暑に訪れたクローチェの人となりと哲学を知ることによって立ち直りのきっかけをつかむことができた。プレッツォリーニは、クローチェの哲学に自分には欠けていた社会との連帯を見出した、と回想している⁽⁹⁾。このことが1908年の《ラ・ヴォーチェ》創刊につながるわけである。《ラ・ヴォーチェ》編集に苦闘していたプレッツォリーニにとって、クローチェは常に精神的支柱だった。

しかし、第一次対戦勃発に際し、イタリアの取るべき道についての二人の考え方には大きな隔たりがあった。これを機に二人の関係は完全に断たれたわけではなかったが、次第に疎遠なものになっていった。この間の両者の手紙の遣り取りを通じて、プレッツォリーニとクローチェの考え方の相違を見てゆくことにしよう。

1914年10月8日付の手紙の冒頭でクローチェはプレッツォリーニに戦争を扇動するのをやめるように勧告し、その理由として、昔から戦闘的とは言えないイタリア国民を戦争に投げ込むことの愚かさ、軍隊の準備不足、同盟国への信義にもとること、国民の間で戦争の必然性が実感されていないことを挙げている⁽¹⁰⁾。こういう状態でイタリアが参戦した場合、その戦争はジャーナリストたちの戦争と呼ばなければならない、と断じ、戦争を扇動するジャーナリストたちを、一夜漬けの準備で試験に合格しようと願う不勉強な子供たちと揶揄している。そして、いつでも参戦できる体勢を取りながら、国民の教育を再開する必要をクローチェは説いている。

イタリアが1882年にドイツ、オーストリアとの間に三国同盟を締結したのは、1870年のローマ併合以来のフランスとの対立の他に、アフリカにおいて植

民地獲得を目指して英仏に牽制され、ドイツの支援を当てにしたからであった。言わば欲得ずくの同盟であったわけだが、クローチェはこれに倫理的な拘束を感じていた。それとも、英仏よりも独逸に親近感を感じていたということなのだろうか。

これに対しプレッツォリーニは、10月9日付の手紙で中立政策の危険を説くことで直ちに反論している⁽¹¹⁾。つまり、ドイツ・オーストリアの側からすれば、イタリアが中立を宣言したことはすでに裏切りであり、彼らが勝利した場合はイタリアに対し懲罰的な戦いを仕掛け、イタリアは単独で打破されることになるし、逆に協商側が勝てば、トリエステはセルビア人の支配下に置かれることになる、と言うのである。

また、クローチェが教育について触れたのに対し、プレッツォリーニは、中立によって卑怯の汚名を受け面目を失った国民にどんな教育をするのか、と問い、それよりも戦争という試験の中で国は救われ、国民は大きな教えを得ることになる、と説いている。デ・フェリーチェも、プレッツォリーニが戦争への参加を道徳的試験、試験として見ていたことを指摘、この試験がイタリア人の道徳的形成を完成させ、イタリアが一つの国民であることを証明するはずであると考えていた、と説明している⁽¹²⁾。事実、先に見た『戦争をやろう』という論文でもプレッツォリーニは、「試験に合格する」という表現を用いている。

イタリアが第一次大戦で65万もの戦死者を出したことを知っている我々は、戦争への参加を国民教育の一環ととらえるプレッツォリーニの態度にはいささか違和感を覚える。しかしながら、次のような上村忠男氏の見解を読むと、戦争に対するプレッツォリーニのこうした態度もある程度納得がゆく⁽¹³⁾。上村氏は、ノベルト・ボッピオの言葉を引いて、「イタリアはつくられた、これからはイタリア人をつくらねばならない」という認識を継承して、知識人とはなによりも教育者であらねばならず、〈国民教育〉の推進こそは知識人がになっている最大の任務であるとする言説が一種の精神主義的な思想と結びついて「イタリア・イデオロギー」として支配していた、と指摘している。もちろん、当のプレッツォリーニも、この戦争がイタリアにあれほどの惨禍をもたらすとは予測していなかったであろう。

その後も戦争をめぐる二人の手紙の遣り取りは続く。クローチェは、中立が古い同盟国に対するイタリアの義務であり、イタリアは物質的にも精神的にも

戦争の準備ができていないという自説を繰り返し、戦争の準備を整えつつ事態の推移を冷静に見守ることを訴えている。プレッツォリーニは10月18日付の手紙で、中立を古くからの同盟国への義務とするクローチェの考えに対し、自分たちの考えで勝手に戦争を始めたドイツやオーストリアに義務を負う必要はないし、もし義務を問題にするのなら、中立も義務を怠ったことになる、と反論している⁽¹⁴⁾。

クローチェは11月23日の手紙で、参戦論に転じて社会党を離脱したムッソリーニの行動について、「社会主義を準備するために戦争をするということなのか」と、当惑を伝えている⁽¹⁵⁾。これに対してプレッツォリーニは、11月25日付の手紙で、ムッソリーニはドイツに対する勝利により自由な体制の保証、革命的な政党にとってより広範な活動の余地を認めていることを説明している⁽¹⁶⁾。これは自由ということに絶対の価値を置くプレッツォリーニの参戦論の根拠でもあっただろう。この後ですぐに彼は、この戦争がイタリアにとっても、世界にとっても絶対に必要である、と説いている。そして、自分の世界に引き籠りがちなクローチェに対し、行動すること、世界の動向に参加することを訴えている。こうした呼びかけにも、プレッツォリーニのクローチェからの離反が認められる。

この書簡集の編者は、クローチェが12月7日付の手紙の中でムッソリーニの転向について触れている箇所についた註の中で、クローチェのジェンティーレあての手紙を引用している⁽¹⁷⁾。戦争がリソルジメントの先人たちの成果を危険にさらすことになるかもしれないのに、参戦派の若者たちは、赤ん坊がオモチャに夢中になるように、戦争を欲している、とクローチェは言う。この一節はクローチェとプレッツォリーニの見解の相違を明瞭に伝えている。この相違は二つの世代の相違でもあった。1866年生まれのクローチェが、リソルジメント以降半世紀にわたるイタリアの歴史を肯定的にとらえているのに対し、1882年生まれのプレッツォリーニは、イタリアの現状に不満を抱き、イタリアを変革することを望んでいた。そして、戦争をそのための手段と位置づけていた。

しかし、後年のプレッツォリーニは、クローチェの戦争反対の態度は保守主義者としては当然である、との見解を示している⁽¹⁸⁾。クローチェのほう戦争によってもたらされる可能性を正しく認識していた、つまり戦争は新しいイタリアを生み出したりはせず、古いイタリアを混乱に陥れるだけであることを理

解していた、と言うのである。だが、この時点のプレッツォリーニは戦争によってイタリアを変えることに熱中していた。

1915年4月26日、イタリア政府は、トリエステ、トレンティーノ地方、フィウメを除くダルマツィアのイタリア帰属を代償に1ヶ月以内の参戦を約束したロンドン条約を密かに協商側と結んでいるが、議会では中立派が多数を占めていた。このため、政府は参戦派の暴徒を国会に乱入させ、中立派の議員を脅迫、政府に全権を委任する法案を通過させるという非常手段に訴えた。このような動きに対して、クローチェは5月16日付の手紙で、参戦論者が街頭での犯罪的な扇動によって議会に圧力をかけようとする光景を嘆き、三国同盟への裏切りに思えるこのような転換には耐えられないことを執拗に訴えている⁽¹⁹⁾。

こうしてイタリアは5月24日にオーストリアに宣戦するわけであるが、議会制度を踏みにじったこのような決定のプロセスは、後年のファシズム体制の樹立に道を開くものであった。ここに至ってクローチェとプレッツォリーニの離反は決定的なものとなった。その後も二人の交流は続くが、5月20日付のカザーティあての手紙の中で、ここ数日のイタリアの動きに高揚したプレッツォリーニは、クローチェをジョリッティ派と決めつけ、恥ずべきことと断じている⁽²⁰⁾。

(3)

1915年5月4日の日記に、プレッツォリーニは、フィレンツェの国立図書館でダルマツィアに関する読書が続いている、と記し、自分の言っていることに確信を持っているし、自国の民族主義者や帝国主義者、はったり屋やうぬぼれ屋や無知な人びとをいら立たせていることに満足している、と続けている⁽²¹⁾。そして、この1915年、彼は、『ダルマツィア』と題する70ページほどの小冊子をヴォーチェ書店から刊行している。末尾には1915年6月19日という日付が記されているが、この書物は、プレッツォリーニが《イル・ポーポロ・ディターリア》の特派員としてローマに赴任した1914年12月初めから志願兵として入営する少し前の1915年6月までの数ヶ月で準備・執筆されたものと考えられる。1914年12月5日付のクローチェあての手紙では、上院の図書館を利用するための推薦状を依頼しているが⁽²²⁾、プレッツォリーニ自身は彼の著作目

録の中に付したコメントにおいて、この本の執筆にはローマの外務省の図書館を利用したこと、もし外務省が彼の意図を理解していたら、図書館の利用は許可されなかっただろう、と記している⁽²³⁾。つまり、この時期の彼は、一方でイタリア参戦の道を模索しつつ、その一方でこの書物に取り組んでいたのである。

それでは、何故プレッツォリーニはこのような切迫した時期にその刊行を考えたのだろうか。『ダルマツィア』執筆の動機は、実は彼のイタリア参戦の願いと深く係っていた。しかし、彼が願ったのは国民的な戦争であって、帝国主義の戦争ではなかった。イタリア参戦を願う人びとの多くはダルマツィア併合を考えていたが、彼はこうした考えには与しなかった。最初にも述べたように、プレッツォリーニは帝国主義には反対だった。彼にとって、それはイタリア参戦の大義を汚すものでしかなかった。彼はダルマツィア併合の根拠を否定するためにこの本を書いたのである。ダルマツィア併合の根拠を示すことでイタリア参戦の意義を補強しようというのではないところが、いかにもプレッツォリーニらしい。

プレッツォリーニが知識人として何よりも重視したのは、真実を探究する姿勢だった。政治家は目的のためには時には事実を誇張したり隠蔽したりすることがある。彼は政治家のそうした態度を容認できなかった。彼が常に政治とは一線を画した理由の一つはそこにある。この『ダルマツィア』という書物にも真実探究の姿勢が一貫して認められる。プレッツォリーニはスラブ系の言語はできなかつたし、ダルマツィアの地を訪れたこともなかつた。彼はこうした制約の中でできる限り客観的にダルマツィアの姿を描き出そうと努めた。イタリア参戦を望んだプレッツォリーニの意図が民族主義的、帝国主義的なものではなかったことを明らかにするためにも、この書物を簡単に紹介しておこう。

プレッツォリーニはまず、多くの人によってダルマツィアのイタリア帰属の根拠とされる、1000年から1797年までのきわめて長期にわたるヴェネツィアのダルマツィア支配を不安定かつ不完全なものとして見なしている⁽²⁴⁾。しかも彼によると、ヴェネツィアの主要な目的は木材の確保にあり⁽²⁵⁾、その支配はダルマツィアを長く停滞させたただけであつた。プレッツォリーニは、この地に認められるイタリア的な要素はヴェネツィア支配によるものではなく、ルネッサンスの偉大な文明の功績である、としている⁽²⁶⁾。そして、ダルマツィアにイタリア文明が深く浸透するのは、むしろ1815年に始まるオーストリア支配以降、商

業が活発になり都市が発達してからのほうが顕著である、と指摘している⁽²⁷⁾。

言語についても、沿岸都市ではイタリア語、内陸の農村部ではスラブ系の言語という従来の考え方をやや訂正して、プレツォリーニは、沿岸都市ではイタリア語とスラブ系の言語が併用され、農村部ではスラブ系の言語のみが使用されてきた、と説明している⁽²⁸⁾。彼はさらに、一部の住民がイタリア語を使用したとしても、そのことは必ずしも彼らがイタリア人であることを証明するものではなく、むしろ、クロアチアのドイツ語の場合と同様に、ダルマツィアが文化的な言語としてはイタリア語を持ったスラブ系の地域であることを意味している、と解釈している⁽²⁹⁾。人口の面から見ても、イタリア人は極端な少数派である、と断定し⁽³⁰⁾、将来イタリア人移民を大量に送り込むことによってイタリア系住民の比率を高めるという可能性も否定している⁽³¹⁾。ダルマツィアの住民が職を求めてカリフォルニアやアルゼンチンに移住している現状を見れば、それは明らかだからである。

プレツォリーニは、ダルマツィア併合はセルビア民衆の敵意をあおるだけで、戦略的にもあまり意味がない、と主張している⁽³²⁾。重要なのはアドリア海の中立化であって、それは、ダルマツィアを領有しなくても、いくつかの島を戦略的に確保すれば、あとは艦隊の能力によって達成可能だからである。

II.

1915年5月24日にイタリアが参戦すると、プレツォリーニは直ちに従軍を志願、7月末には入営している。早くも9月には交戦地域に配属され、11月10日に旧知の文学者ジョズエ・ボルシが戦死したとき、彼の部隊はボルシの部隊のすぐ側にいた。プレツォリーニはその自伝の一章をボルシの死に当てている⁽³³⁾。しかし、彼が前線にいたのは3ヶ月足らずで、11月末にはピサで新兵の訓練に当たっている。翌1916年も各地で新兵の訓練という任務を続けているが、4月14日の日記には、戦争が1916年まで続くとは思っていなかったことが記されている⁽³⁴⁾。1917年1月末にはローマの動員史料編纂所の勤務を命じられるが、勤務の形態は一般の軍役とは異なり、かなり自由だったようで、プレツォリーニは執筆活動などを再開している。10月にイタリアがカポレットで敗北を喫すると再三にわたって前線への復帰を申請、1918年8月によ

やく受理されて、これ以降特別攻撃隊に同行、11月4日にはヴィットーリオ・ヴェーネトを見下ろす丘の上で休戦を伝える声を聞いた。

従軍の体験はプレッツォリーニにとって全く新しいものだった。県知事の息子として育った彼はその自伝に、戦争によって初めて上品な世界の外へ出ることになった、と記した⁽³⁵⁾。書物でしか知らなかった世界を目の当たりにすることになったのである。33歳にして人生を理解し始めた、とも記している⁽³⁶⁾。こうした経験は彼を打ちのめすものであった。1916年3月31日の日記には、軍隊に入る前は自分の同国人を知らなかった、イタリア人を作り直すことは絶対に不可能だろう、と彼は記している⁽³⁷⁾。後年プレッツォリーニは、軍隊に身を置いたことは彼にとってあらゆる階層のイタリア人との最初の出会いだったこと、その現実が彼を落胆させ革命に恋する気持ちを持たなくさせたこと、この苦い経験が『カポレット』、『ヴィットーリオ・ヴェーネト』、『イタリア生活の規範』という3つの小品に結実していることを認めている⁽³⁸⁾。これらの作品を通してプレッツォリーニにおける第一次大戦の意味を考えてみることにしよう。

(1)

『カポレット』は、1917年11月初め、つまりカポレットの敗戦の直後に書かれ、戦後最初のプレッツォリーニの著作として1919年に『カポレット後』というタイトルで刊行された、60ページ足らずの小さな書物である⁽³⁹⁾。すぐに再刊され、その際現在のタイトルに改題された。

カポレットは、現在はスロベニア領に属するイタリアとの国境近くの村である。この地で1917年10月24日から29日にかけて、ドイツ・オーストリア軍は革命によるロシアの戦線離脱にも助けられて前線を突破、イタリア領内のヴェーネト平原に進撃、イタリア軍は辛うじてピアーヴェ川の線で踏みとどまった。この敗北によってイタリアは国家存亡の危機に直面、オルランドが首相に就任し、参謀総長も交代した。この敗戦はプレッツォリーニを揺り動かした。1918年のソッフイチあての手紙の中で、カポレットの破局が無気力状態に陥っていた自分を目覚めさせたこと、イタリアを完全に作り直すためにはイタリア国民の諸々の欠点を見つめ、それに対する粘り強い戦いを進めなければならない

いことを語っている⁽⁴⁰⁾。こうした目的に沿って書かれたのがこの小冊子だった。従軍体験はプレッツォリーニを失望させ、イタリアを変えることの難しさを彼に痛感させた。しかし、彼は完全には希望を捨てることはなかった。イタリアの敗戦は逆に彼を奮い立たせたのである。

プレッツォリーニはまず、カポレットの破局を複雑で多様な諸々の遠い原因の結果引き起こされたものと認識、作戦の失敗や武器や兵員の劣勢に由来する単なる軍事的な敗北ではなく、モラルの崩壊としてとらえている⁽⁴¹⁾。このモラルの崩壊によって軍隊はその戦争能力のかなりの部分を失うことになった、と言うのである。

プレッツォリーニは破局の諸々の要因の第一として、イタリア軍が1915年5月に軍事面でも精神面でも全く準備のないままに戦争に突入したことを挙げている⁽⁴²⁾。軍の指導者たちは、ヨーロッパで大戦の火ぶたが切られた前年の8月以降、戦争の性格が一変してしまったことを認識していなかった。その結果、1915年中にイタリア軍はその最良の部分を失い、この年の終わりにはすでに歩兵はやる気をなくしていたことを、プレッツォリーニは指摘している⁽⁴³⁾。

続いてプレッツォリーニは、大局的な戦略概念の欠如、戦時下でも官僚機構がそれに即応した態勢を取れなかったこと、国民の間に情報が正しく伝達されなかったこと、最高司令部と政府の責任のなすり合い、様々な形のサボタージュなどを、敗北の要因として挙げているが、真の意味での指導者の不在が特に注目される。これは軍隊だけの現象ではなく、イタリア全体の特徴である。大戦によって露呈したイタリア軍の諸々の欠陥はイタリア全体の欠陥の反映であり、イタリアが、あるいはイタリア人が潜在的に持っていた欠陥が戦争を通じてより鮮明な形で表面化したものである、と彼は言う。

イタリア軍の将校の多くは中産階級の出身だったが、プレッツォリーニは、イタリアには中産階級という名称に値する階層は存在せず、イタリアの中産階級は自分たちの特権は行使しておきながら、彼らの地位に伴う義務や責任の重さは感じていない、と痛烈に批判している⁽⁴⁴⁾。プレッツォリーニはかつて若手将校たちの放縦な生活を批判する文章を発表して筆禍事件を招いたことがあったが⁽⁴⁵⁾、彼によれば、統一後のイタリアには軍事的な伝統は発達せず、軍人は尊敬されず、中産階級はその劣悪な子弟を軍隊に送り込んでいた。

その一方で兵士の側にも問題はあった。将校が中産階級を反映していたのと

同様、兵士はイタリアの民衆を反映していた。軍事的な規律の欠如は、イタリア人が市民としての規律を欠いていたためである。「イタリアの兵士は仕事をやる意欲を欠き、あまり几帳面ではなく、祖国愛を持たず、規律に乏しく、義務感も薄弱である」と、プレツォリーニは手厳しい評価を下している⁽⁴⁶⁾。そんな彼も、イタリア軍兵士の類まれな耐え忍ぶ能力は認めていた。それはイタリア国民が何世紀も前から保持してきた特質だった。彼はまた、「ばか者だけが戦争をやる」という考えが蔓延していたことを指摘している⁽⁴⁷⁾。こうした風潮は容易にサボタージュにつながる。

プレツォリーニによると、イタリア民衆の資質である抜け目のない賢さは彼らの生活の個人的な問題を解決するのには役立っているが、個人の利益は集団の利益につながるといふ認識は彼らには乏しい⁽⁴⁸⁾。さらに彼は、イタリア国民にはドイツ民族が持っている祖国への強い思いや集団的な知性が欠けていたこと、民衆は自己のうちに閉じこもるか、せいぜい家族という枠の中で生きていたことを指摘している⁽⁴⁹⁾。これでは国と国が総力を結集してぶつかり合う新しいタイプの戦争にイタリアは不向きと言わざるをえない。

イタリア人が個人として自己中心主義の悪弊に陥っていたとすれば、国家もそれは同じだった。プレツォリーニは、戦争目的をトレントやトリエステに対する国民的渴望、つまり失地回復運動の上に据えたことを誤りとしている⁽⁵⁰⁾。こうした二次的な問題の解決は、世界的な問題の解決の中に見出すべきである、と彼は主張している。イタリアがヨーロッパの田舎から抜け出すことがプレツォリーニの悲願だった。

しかしながら、こうした絶望的な状況の中にあって、プレツォリーニは完全に希望を捨てたわけではなかった。敗北によってイタリアの病根が明らかになったことに一筋の光明を見出したのである。彼が希望を託したのは、イタリアには目立たない所にまだ誠実で有能な人びとがいるという事実だった⁽⁵¹⁾。これらの人びとは指導者ではなかったが、二次的な部署で多くの無責任で無能な人びとに代わって懸命の努力を重ねていた。

最後にプレツォリーニは、もしイタリアがこのまま変わらなければ、賢明で有能な人びとは余所へ移り住むことになるだろう、と語っているが⁽⁵²⁾、そういう彼自身も 1925 年にフランスへ、1930 年にはアメリカに移り住むことになる。

(2)

『ヴィットーリオ・ヴェーネト』は 1920 年に刊行された 50 ページ足らずの小冊子である⁽⁵³⁾。本文の最後に 1919 年 11 月という記載があることから、大戦終結後 1 年間の内外の動きを踏まえてこの小著が書かれたことがわかる。本文のほぼ三分の一くらいの長さの序文が付されているが、その最後に 1920 年 3 月 30 日の日付がある。この序文の中でプレッツォリーニは自らの知識人としての姿勢について語り、正しく考察し、はっきり見ようと努めていることを述べている⁽⁵⁴⁾。大切なのは、イタリア人としてではなく人間として考察することであり、人間であるためには民族的相違を克服することが必要である、と彼は言う。さらに彼は、民族の問題は今日における主要な問題ではないし、問題を解く鍵でもない、と続けている。彼にとって、民族主義的な感情の吹き荒れる内外の情勢は憂慮すべきものであった。こうした危機感が彼にこの小著を書かせたのである。しかし、その刊行は多くのイタリア人の神経を逆なでした。1920 年 4 月 15 日の日記には、『ヴィットーリオ・ヴェーネト』の刊行が『カポレット』同様物議をかもし、大戦終結後も勤務を続けていた動員史料編纂所を解雇されたことが記されている⁽⁵⁵⁾。

ヴィットーリオ・ヴェーネトはヴェネツィアの北約 60 キロに位置する小都市で、第一次大戦の最終段階である 1918 年 10 月 24 日から 11 月 3 日にかけて決戦の舞台となったことで知られている。ところが、プレッツォリーニはこの地が決戦の舞台となったという通説を退け、この戦いを本当の大規模な戦闘ではなく、オーストリア軍の後衛とイタリア軍の前衛の間の数度の衝突を伴う追撃戦と説明している⁽⁵⁶⁾。これに反し、イタリアではこの戦いを大勝利とする宣伝が繰り返されていた。この書物の終わりの方でプレッツォリーニは、ヴィットーリオ・ヴェーネトの偉大な勝利という偽りの価値が歴史に導入されるのを阻止しなければならない、と述べている⁽⁵⁷⁾。1918 年の 9 月末には枢軸側のブルガリアが戦線を離脱、オーストリア・ハンガリー帝国内の諸民族は独立を要求、軍隊では集団的命否や脱走が日常化していた。オーストリア軍は撤退を開始、連合国側に休戦を要請し、大部分の部隊は戦意をなくしていた。国家そのものが解体しつつあったのである。こうした状況では、イタリア軍がヴィットーリオ・ヴェーネトにおいて自らの力でオーストリア軍を打ち負かしたと

はとてとも言えない。

ヴィットーリオ・ヴェーネトの勝利を誇張させたものとして、プレッツォリーニは二つの欲求を挙げている⁽⁵⁸⁾。一つは栄光に満ちた戦後を用意したいという軍人たちの欲求であり、もう一つはこの勝利を連合国にひけらかし、民族主義的なうぬぼれなどをかき立てるために最大限に利用しようとする政治家たちの欲求である。1919年1月から開かれたパリ講和会議はイタリアに満足のゆく結果をもたらすことにはならなかったが、イタリアは大戦において連合国側の重要な一翼を担ったという錯覚に酔っていたのである。

プレッツォリーニは、1918年6月のグラッパ山やピアーヴェ川での戦いをイタリア軍の本当の勝利と認めた上で、何故それが本当の勝利としてしかるべき形で祝われなかったのか、検討を加えている⁽⁵⁹⁾。彼に言わせると、これらの勝利は、大げさな舞台装置を好むイタリア人の目から見ると、あまり見栄えのしない、美辞麗句でもって飾り立て誇張するには不向きな勝利と映った。それは、カポレットの敗北をふまえ、地道な努力と確固たる意志によってもたらされた勝利だった。それは、参謀本部の作戦による勝利でも、天才的な指揮官による勝利でもなく、大佐以下現地で実際に戦った兵士たちの粘り強い努力によってもたらされた勝利だった。ところが、参謀本部はこうした勝利よりも、ヴィットーリオ・ヴェーネトの勝利を歓迎したのである。

控え目で誠実な人びとの粘り強い努力によるグラッパ山やピアーヴェ川の勝利によって、イタリアはカポレットの惨禍と恥辱を克服することができた。それにもかかわらず、大戦後のイタリアはこれらの勝利を等閑にして、ヴィットーリオ・ヴェーネトの偽りの勝利を偉大な勝利と喧伝した。プレッツォリーニに言わせれば、イタリアは本当の価値を忘れて、偽りの価値をひけらかすことで生きていた⁽⁶⁰⁾。これでは、カポレットの敗北はイタリアに有益だったが、ヴィットーリオ・ヴェーネトの勝利は有害だったということになる、とプレッツォリーニは断定している⁽⁶¹⁾。つまり、カポレットの敗北という大きな犠牲によってせっかく回復されたイタリアの美質が中途半端な勝利によって再び台無しにされることになるのである。プレッツォリーニは大戦後の内外の情勢を見やりながら、こうした事態を深く憂慮していた。

それでも最後にプレッツォリーニは、大戦後のヨーロッパの地図は戦前の地図よりもまともだし、イタリアの地位も高まっていると認めた上で、まだ何か

得るものが残っているとしたら、時を待つことによって、そして自分自身を改善することによってそれを手にすることが可能になる、と自己変革の必要性を訴えている。そして、真の問題は外交ではなく内政の問題、民族の心の問題、自分自身に対する誠実さの問題である、と結んでいる⁽⁶²⁾。

(3)

『イタリア生活の規範』は1917年に《リヴィスタ・ディ・ミラーノ》誌に掲載され、その後かなり加筆され、1921年に60ページの小さな本として刊行された⁽⁶³⁾。全体は12章62節から構成されているが、1章が16節からなる場合もあるし、1節で1章という場合もある。節の長さもまちまちで、短いアフォリズム的な文が一つで1節ということもあるし、もう少し長い節もある。前にも触れたように、プレッツォリーニは第一次大戦に従軍したことによって、初めてあらゆる階層のイタリア人を虚飾のない、むき出しの形で知ることになった。この体験をもとにイタリアとイタリア人の性格について批判的な考察を試みたのがこの書物である。全体の基調は苦い絶望に貫かれているが、随所に乾いたユーモアも感じられる。作家のモラヴィアはプレッツォリーニの印象を「やせていて背が高く、かさかさした感じだった」、「慇懃無礼に近く、迷うことなく厳格で」と語っているが⁽⁶⁴⁾、そうした様子はこの小著からも感じ取ることができる。

しかしながら、モラヴィアが見たのは、ファシズム体制成立後自分をイタリアでは無用の存在と見なして、フランス、次いでアメリカに移り住んだ1930年代のプレッツォリーニだった。この書物の序文の中で彼は、「新世界へ旅発つ最初の汽船に何故乗らないのか、と自問することがある」と書きながらも⁽⁶⁵⁾、政治改革よりも教育改革を通して、制度の変更よりもイタリア人の性格の改善を通して、イタリアを変革する希望を述べている⁽⁶⁶⁾。この時点の彼はまだイタリア改革の希望を完全には捨て切れず、後年のような諦観の域には達していなかった。この本に描かれたイタリアやイタリア人の性格について、いくつかの点を紹介してみよう。

プレッツォリーニはイタリア市民を利口な人間と馬鹿な人間の二つに分けている⁽⁶⁷⁾。利口な人間は抜け目のない人間と言い換えることができるかもしれな

い。彼はイタリア人の理想として、少ない苦勞で沢山稼ぐことを挙げているが⁽⁶⁸⁾、これを実践しているのが利口な人間である。彼はまた、「のりくりやれ」とか「危険は冒すな」とか「いっぱい食わす」といった表現を、利口な連中は社会生活のルールとして採用した、と述べている⁽⁶⁹⁾。そして、利口な連中が高い地位にあるのは、ただ単に彼らの抜け目のなさによるのではなく、イタリア人が抜け目のなさを崇拜しているからである、と説明している⁽⁷⁰⁾。逆に言うと、馬鹿な人間は徹底的に軽蔑されることになるのかもしれない。ただプレッツォリーニが言う馬鹿な人間は愚かな人間とは違う。それは本当の収入を税務署に申告する人間であり、損をしてでも一旦した約束は守る人間であり、利口な人間には目的しかないのに対して、原則を持った人間である⁽⁷¹⁾。彼に言わせると、馬鹿な人間がいるおかげで社会は成り立っている⁽⁷²⁾。馬鹿な人間は仕事をし、付けを払い、死んでゆくのにに対して、利口な人間は何もせず、消費し享受する。プレッツォリーニはそういう馬鹿な人間に希望を託していた。

プレッツォリーニは、イタリア人は文学的で大げさな、飾り立てた調子に固執している、と言う⁽⁷³⁾。これに反し彼が理想とするのは、実務的で厳格な人間である。彼は、政治家の第一の資質として、沢山の言葉を用いながら何も伝えないことを挙げ、何も伝えないことを華麗な弁舌にまで高めれば、完成の域に達したことになる、と皮肉をこめて語っている⁽⁷⁴⁾。華麗ではあるが空疎なレトリックの過剰、これは彼が忌み嫌うイタリアの伝統だった。後年アメリカにおいて彼は、成功したイタリア移民のはったりや大言壮語を嫌と言うほど見聞きすることになるが、これもイタリア流レトリックの一種かもしれない。

プレッツォリーニはさらに、イタリアでは物事が法や規則、正規の手順によってではなく、現実的な折り合いや妥協によって運ぶことを指摘している⁽⁷⁵⁾。彼によれば、何かを得るには、たとえそれが正当なものであっても、コネやゆすりなどに頼るしかない⁽⁷⁶⁾。政治的な決定を引き出すのに最も有効な手段は広場でのデモである⁽⁷⁷⁾。イタリア参戦の決定もファシズムの権力奪取も街頭での威嚇行動が決め手となったのは周知のことである。

イタリアの特徴としてよく言われることではあるが、プレッツォリーニも、イタリアにはピエモンテ人やトスカーナ人はいても、本当のイタリア人はあまり存在しないことを取り上げている⁽⁷⁸⁾。彼はまた、家族だけがイタリアで唯一の堅固な集団と規定している⁽⁷⁹⁾。さらに彼は、イタリアは、ほぼローマまでの

ヨーロッパ的イタリアとローマよりも南のアフリカの、あるいはバルカン的イタリアに分かれていて、後者は前者の植民地である、と指摘している⁽⁸⁰⁾。戦争という試練を通過することでイタリア人を一つの国民にすることが、プレッツォリーニの参戦論の主要な根拠だったわけだが、結局は戦争によってもイタリア人を変えることは難しいことを彼は痛感させられたのである。

むすび

1908年に雑誌《ラ・ヴォーチェ》を創刊して以来、プレッツォリーニの願いは、イタリア人を啓蒙することによってイタリア改革を実現することであった。1914年にヨーロッパに大戦が勃発したとき、彼は、戦争という試練を通してイタリアを変えることができる、と考えた。しかし、それは甘い幻想にすぎなかった。従軍体験は、言わば世間知らずのお坊ちゃんだった彼の夢を無残に打ち砕いた。1922年に成立したファシズム体制が大戦の当然の帰結であることを理解したとき、イタリア参戦に加担した彼の絶望はますます深まることになっていった。

注

- (1) M.E.Raffi e M.Richter(a cura di), Giuseppe Prezzolini-Ardengo Soffici Carteggio II 1920-1964, Roma, 1982, p.130.
- (2) Giuseppe Prezzolini(a cura di), Tutta la guerra Antologia del popolo italiano sul fronte e nel paese, Milano, 1968, p.10.
- (3) Giuseppe Prezzolini, La Dalmazia, Firenze, 1915, p.67.
- (4) Giuseppe Prezzolini, Diario 1900-1941, Milano, 1978, p.140.
- (5) Giuseppe Prezzolini, L'italiano inutile, Milano, 1983, p.204.
- (6) Renzo De Felice, Prezzolini, la guerra, il fascismo, in Francesco Pino Pongolini(a cura di), Giuseppe Prezzolini 1882-1982 Atti delle giornate di studio 27 gennaio e 6 febbraio 1982, Bellinzona, 1983, pp.31-32.
- (7) Dolores Contani(a cura di), Alessandro Casati-Giuseppe Prezzolini Carteggio II 1911-1944, Roma, 1990, p.402.
- (8) 青年時代のプレッツォリーニとクローチェの関係については、拙稿「雑誌《ラ・ヴォーチェ》の軌跡(1908-1913)」『社会科学討究』第97号、1988年、参照。
- (9) Giuseppe Prezzolini, L'italiano inutile cit., p.101.

- (10) Emma Giammattei(a cura di), Benedetto Croce-Giuseppe Prezzolini Carteggio II 1911-1945, Roma, 1990, pp.433-434.
- (11) Ibid., p.435.
- (12) Renzo De Felice, Prezzolini, la guerra, il fascismo cit., p.32.
- (13) 上村忠男『国民革命幻想』、未来社、2000年、121-122頁。
- (14) Emma Giammattei(a cura di), Benedetto Croce-Giuseppe Prezzolini Carteggio II 1911-1945 cit., p.440.
- (15) Ibid., pp.443-444.
- (16) Ibid., p.444.
- (17) Ibid., p.447.
- (18) Giuseppe Prezzolini, Manifesto dei conservatori, Milano, 1972, p.105.
- (19) Emma Giammattei(a cura di), Benedetto Croce-Giuseppe Prezzolini Carteggio II 1911-1945 cit., p.451.
- (20) Dolores Contani(a cura di), Alessandro Casati-Giuseppe Prezzolini Carteggio II 1911-1944 cit., p.432.
- (21) Giuseppe Prezzolini, Diario 1900-1941 cit., p.155.
- (22) Emma Giammattei(a cura di), Benedetto Croce-Giuseppe Prezzolini Carteggio II 1911 1945 cit., p.446.
- (23) Margherita Marchione(a cura di), Prezzolini : un secolo di attività, Milano, 1982, p.95.
- (24) Giuseppe Prezzolini, La Dalmazia cit., p.6.
- (25) Ibid., p.7.
- (26) Ibid., p.10.
- (27) Ibid., p.32.
- (28) Ibid., p.26.
- (29) Ibid., p.48.
- (30) Ibid., p.42.
- (31) Ibid., p.47.
- (32) Ibid., pp.63-64.
- (33) Giuseppe Prezzolini, L'italiano inutile cit., pp.184-199.
- (34) Giuseppe Prezzolini, Diario 1900-1941 cit., p.212.
- (35) Giuseppe Prezzolini, L'italiano inutile cit., p.192.
- (36) Ibid., p.195.
- (37) Giuseppe Prezzolini, Diario 1900-1941 cit., p.210.
- (38) Giuseppe Prezzolini, Manifesto dei conservatori cit., p.108.
- (39) Giuseppe Prezzolini, Dopo Caporetto, Roma, 1919. 1957年にプレッツォリーニの著作のアンソロジーが刊行されたとき、そこに収録された。このアンソロジーは1971年にス

- パドリーニの序文を加えて再刊されたが、筆者はこの 1981 年版を使用。 Giuseppe Prezzolini, *Il Meglio*, Milano, 1981.
- (40) M.Richter(a cura di), Giuseppe Prezzolini-Ardengo Soffici *Carteggio I 1907-1918*, Roma, 1977, pp.306-307.
- (41) Giuseppe Prezzolini, *Il Meglio cit.*, p.265.
- (42) *Ibid.*
- (43) *Ibid.*, p.268.
- (44) *Ibid.*, p.273.
- (45) 拙稿「雑誌『ラ・ヴォーチェ』の奇跡(1908-1913)」前掲、参照。
- (46) Giuseppe Prezzolini, *Il Meglio cit.*, p.276.
- (47) *Ibid.*, p.278.
- (48) *Ibid.*, pp.296-297.
- (49) *Ibid.*, pp.298-299.
- (50) *Ibid.*, p.293.
- (51) *Ibid.*, p.302.
- (52) *Ibid.*, p.304.
- (53) Giuseppe Prezzolini, Vittorio Veneto, Roma, 1920. この本も *Il Meglio cit.*に収録されていて、筆者もそれを使用した。
- (54) Giuseppe Prezzolini, *Il Meglio cit.*, p.308.
- (55) Giuseppe Prezzolini, *Diario 1900-1941 cit.*, p.322.
- (56) Giuseppe Prezzolini, *Il Meglio cit.*, p.313.
- (57) *Ibid.*, p.323.
- (58) *Ibid.*, p.317.
- (59) *Ibid.*, pp.319-321.
- (60) *Ibid.*, p.323.
- (61) *Ibid.*
- (62) *Ibid.*, p.324. ここでプレッツォリーニは *verità* 「真実」という使い慣れた言葉を使っているが、筆者はここではこの言葉を「誠実さ」というふうに理解した。
- (63) Giuseppe Prezzolini, *Codice della vita italiana*, Roma, 1921. これも *Il Meglio cit.*に収録されているが、筆者は、1970 年に書かれたウイットに富んだ短い自伝的エッセーを付して 1990 年に刊行された版を使用した。 Giuseppe Prezzolini, *Codice della vita italiana*, Roma, 1990.
- (64) アルベルト・モラヴィア、アラン・エルカン / 大久保昭夫訳 『モラヴィア自伝』、河出書房新社、1992 年、109 頁。
- (65) Giuseppe Prezzolini, *Codice della vita italiana cit.*, p.14.
- (66) *Ibid.*, p.15.
- (67) *Ibid.*, p.17.

- (68) Ibid., p.41.
- (69) Ibid., p.52.
- (70) Ibid., pp.20-21.
- (71) Ibid., pp.17-18.
- (72) Ibid., p.19.
- (73) Ibid., p.15.
- (74) Ibid., p.28.
- (75) Ibid., p.35.
- (76) Ibid., p.24.
- (77) Ibid., pp28-29.
- (78) Ibid., p.48.
- (79) Ibid., p.51.
- (80) Ibid., p.31.